

山口町人安部家の

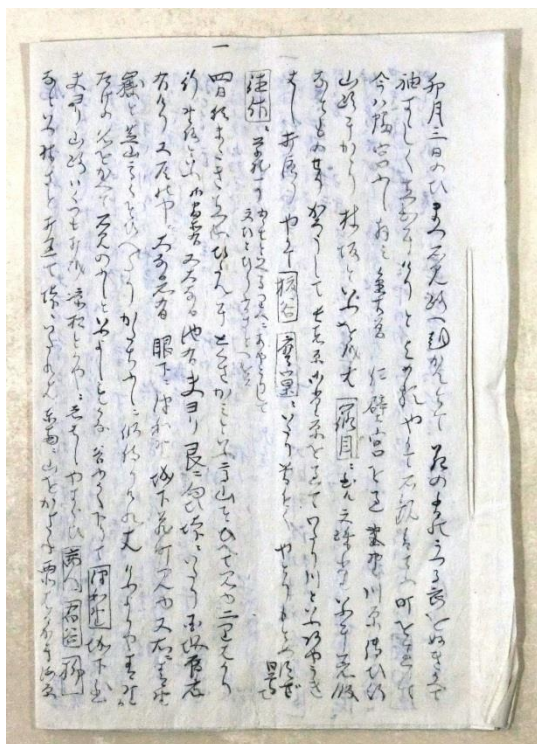
中国四国旅日記

—「石見国・出雲国記行」—

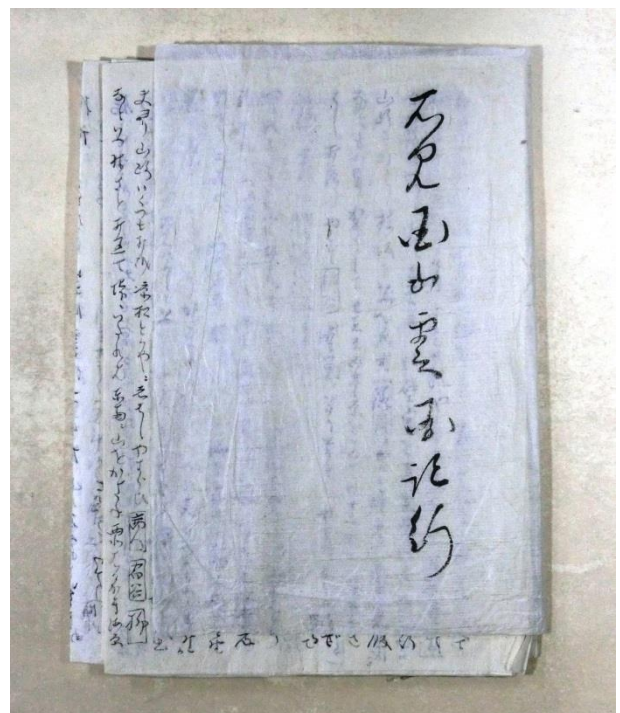


「石見之國全図」 毛利家文庫58絵図208

目次	
目次	1
解説	2
「石見国・出雲国記行」ルート図	5
「石見国・出雲国記行」行程表	6
凡例	7
石見国・出雲国記行	8



綴りの冒頭部分



「石見国出雲国記行」

解説

平成27年度古文書実践講座の2班は、江戸時代の防長人による中国・四国の旅をテーマに、3つの旅日記を解説した。そのひとつが、萩藩領山口町の町人安部氏が記した旅日記「石見国・出雲国記行」(当館蔵、安部家文書⁵³⁵)である。

安部家および安部家文書 安部家は、江戸時代、山口町の道場門前町に居を構え、代々商業を営み、山口町の大年寄役などを務めたほか、屋敷が脇本陣として利用されるなど、江戸時代の山口町を代表する町家のひとつであった。現在は同家の門が残るほか、道場門前に架かる橋に「安部橋」の名前が残る。安部家文書は近世山口町の歴史を知る上で貴重な史料であり、現在、山口県文書館に寄託されている。

「石見国・出雲国記行」の記主および年代 「石見国・出雲国記行」

は四枚が綴られた薄い冊子と未綴の四枚の縦紙からなる。かなを多く用いて記された文学性の高い旅日記だが、完成されたものではなく推敲段階のものである。記主は記されていないが、安部家八代目当主安部四郎右衛門(宗信)と推測される。四郎右衛門は、「姿性物に厚く、家業大いに興る」(『近世防長人名辞典』)と評される人物で、天保二年(一八三一)に六八才で死去している。

彼は、文化二年(一八〇五)、遠く陸奥国をはじめ、全国二〇ヶ国

以上をめぐる大旅行を行い、旅日記「あつまにき」を残している(平成24年度実践講座で解説)。この旅日記もかな主体で記された文学性の高い旅日記である。その共通性から、「石見国・出雲国記行」の記主に八代目四郎右衛門の可能性を考えたい。

「石見国・出雲国記行」には年号の記載はなく、何時の旅であったかは不明である。ただし、四月二十七日条には、出雲国枕木山華藏寺で日の出を見て、「昔ふし(富士)ニて拝ミ奉りけるも同しやうにおもはれて難有さいはんかたなし」と、文化二年の旅行で富士登山をし、御来光を拝んだことを思い出している。このことから、この旅が文化二年以後であることは間違いない。また、四月十七日、石見国江津の手前、和木浦を通過した際、「先月九日」和木浦で大火があり一三〇軒が焼失したと記している。この大火の年がわかれば旅の年も確定できるであろう。現時点では、一九世紀前半期の旅とするに止めておく。

旅の概要 「石見国・出雲国記行」は、四月三日、山口道場門前の

自宅を発するところから始まる。石州街道を北上し、その日は長門国徳佐に泊まり、翌日津和野に至る。以後のルートは表および図に示したとおりで、山陰道を通って石見国内を益田、浜田、石見銀山、大田と進み、二十一日に出雲国杵築着。出雲国内では、出雲大社、鰐淵寺、華藏寺(枕木山)、清水寺などの著名な寺社、松江、広瀬富

田城址などを巡っている。五月二日、米子城下を通り伯耆国へ入る。大山を訪問した後、四日に美作国へ至り、勝山城下通過後、津山往來を南下して備前国に入り、七日岡山着。その後、海を渡り八日丸亀（讃岐国）に泊まり、九日琴平参詣。翌日多度津を出、鞆（備後国）寄港後、海路を進んで竹原（安芸国）に泊まり、翌日帰路に着いた。日記はここで終わり山口帰着日は記されていない。

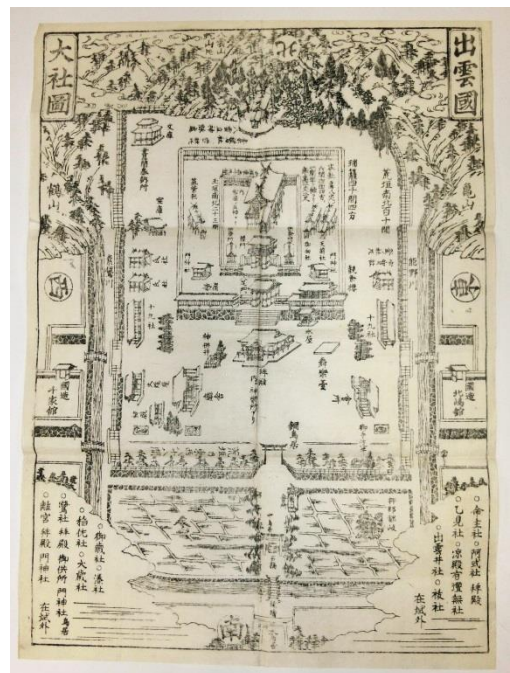
旅は、山口出発後、四〇日ほどをかけ長門・石見・出雲・伯耆・美作・備前・讃岐・備後・安芸など中四国九ヶ国を巡るものであったが、多くの日数を費やしたのは石見・出雲であった。各地の寺社仏閣や名所などを数多く訪れているが、単なる物見遊山の旅ではなかった。所々の有名な僧、「性堂聖」（説教・法談を行う高僧）を訪ねたり、四月九日からは浜田の洞泉寺に長期滞在し托鉢を行うなど、信仰の旅という側面を強くもった。

なお、近時国宝となった松江城も目にしており、「城天主、矢倉こち高くそひへてよし」と感想を記している（四月二十六日）。

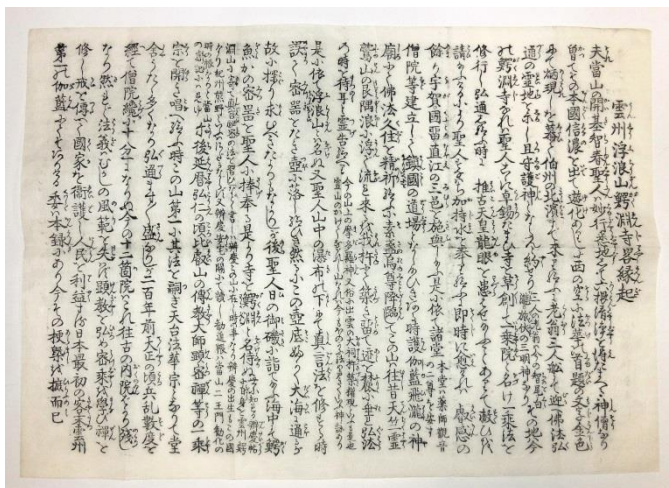
平成27年度古文書実践講座2班 受講生

松永恵子・高橋由多子・中村睦美・石井 勇・中澤 淳・阿部和正

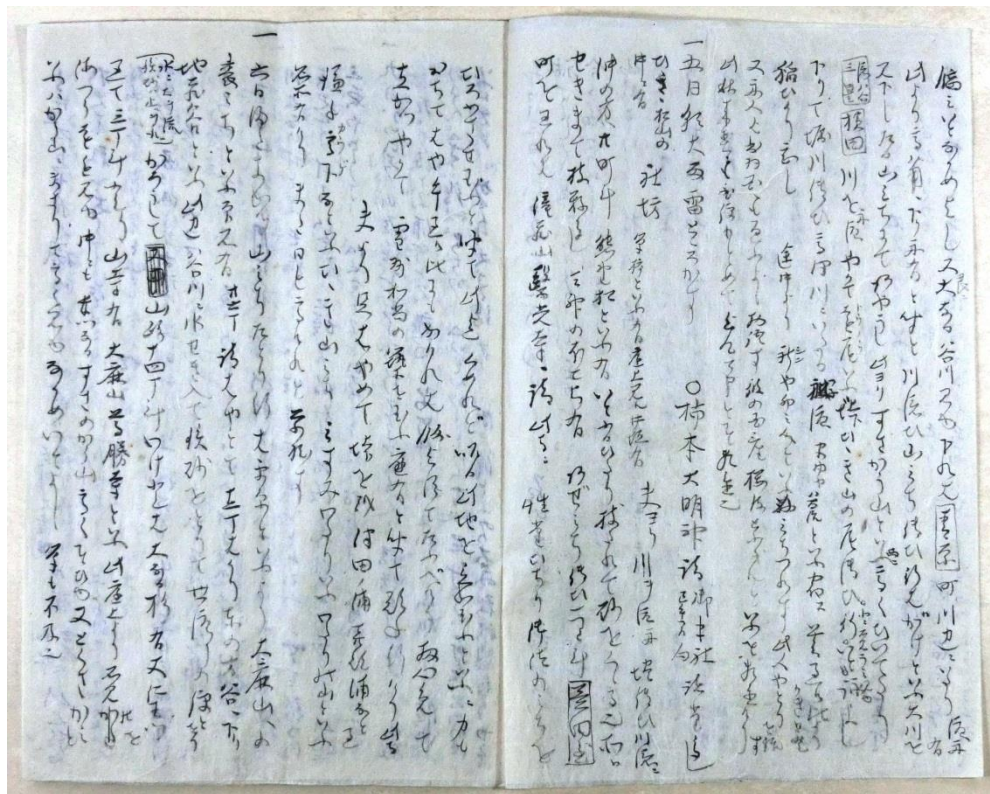
〈サポート〉 山崎一郎・和田秀作・吉積久年（山口県文書館）



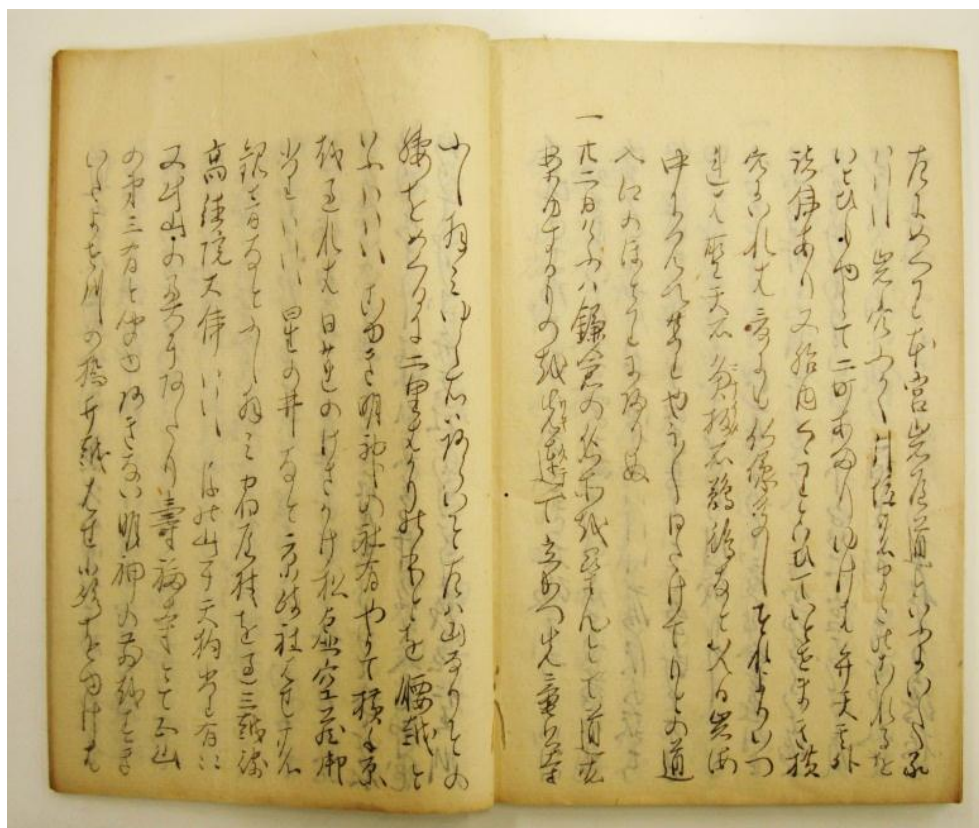
「出雲国大社図」（安部家文書 1450）



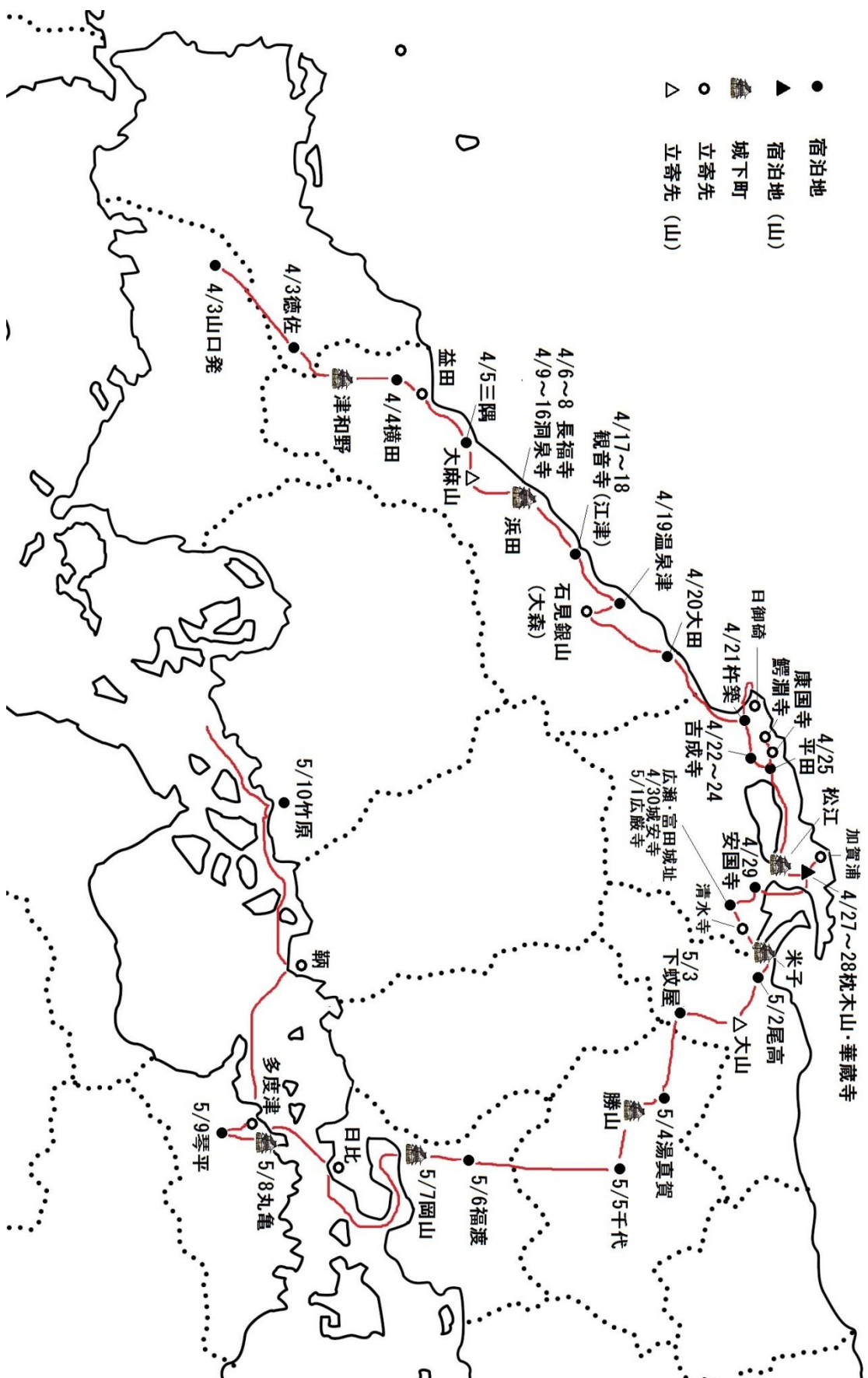
「鰐淵寺略縁起」（安部家文書 1396）



「石見国出雲国記行」



【参考】文化2年「あつまにき」



「石見国・出雲国記行」ルート図

表「石見国・出雲国記行」行程表

	月日	旅程	国名
1	4月3日	山口発→篠目→榎谷→鷹巣→徳佐	周防・長門
2	4月4日	→津和野→商人→宿谷→柳→青原→添谷→横田	長門・石見
3	4月5日	→柿本神社→益田→医光寺・萬福寺→津田→木部→鎌手→三隅	石見
4	4月6日	→平原→尊勝寺→周布村→内村→長福寺	石見
5	4月7日	長福寺	石見
6	4月8日	長福寺	石見
7	4月9日	→熱田→浜田→洞泉寺	石見
8	4月10日	洞泉寺	石見
9	4月11日	洞泉寺	石見
10	4月12日	洞泉寺	石見
11	4月13日	洞泉寺	石見
12	4月14日	洞泉寺	石見
13	4月15日	洞泉寺	石見
14	4月16日	洞泉寺	石見
15	4月17日	→国府→波子→敬川→都野津→和木→江津・観音寺	石見
16	4月18日	観音寺	石見
17	4月19日	→塩田→浅利→黒松→福光下→温泉津	石見
18	4月20日	→御中山→西田→石見銀山→大森→久利→大田	石見・出雲
19	4月21日	→波根→田儀→杵築	出雲
20	4月22日	(海巡り) →出雲大社→今市→直江→吉成寺	出雲
21	4月23日	吉成寺カ	出雲
22	4月24日	吉成寺カ	出雲
23	4月25日	→康国寺→鰐淵寺→平田	出雲
24	4月26日	→松江→枕木山華蔵寺	出雲
25	4月27日	→加賀浦→応海寺→潜門→華蔵寺	出雲
26	4月28日	華蔵寺	出雲
27	4月29日	→本庄町→錦浦→竹矢村・安国寺	出雲
28	4月30日	→出雲江→大内神社→湯谷権現→広瀬・城安寺	出雲
29	5月1日	→厳倉寺→富田月山城址→広厳寺	出雲
30	5月2日	→清水寺→米子→尾高	出雲・伯耆
31	5月3日	→赤松→大神山神社(大山)→御机→下蚊屋	伯耆
32	5月4日	→野武人→郷原→藤森→湯真賀	美作
33	5月5日	→勝山→千代	
34	5月6日	→福渡	
35	5月7日	→建部→金川→岡山(中島)	備中
36	5月8日	→日比→ゆが山→日比→丸亀	備中・讃岐
37	5月9日	→琴平	讃岐
38	5月10日	→多度津→鞆→竹原	讃岐・備中・備後・安芸
39	5月11日	竹原発→	安芸

凡例

一、当史料は、平成27年度、山口県文書館古文書実践講座第2班が解読したものである。

一、漢字は、原則として常用漢字を使用した。

一、変体仮名及び慣用的合字は、「江」(え)、「而」(て)、「者」(は)を除いて、原則として平仮名に改めた。

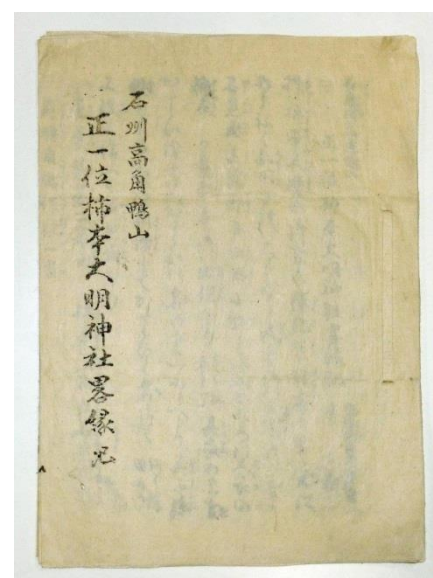
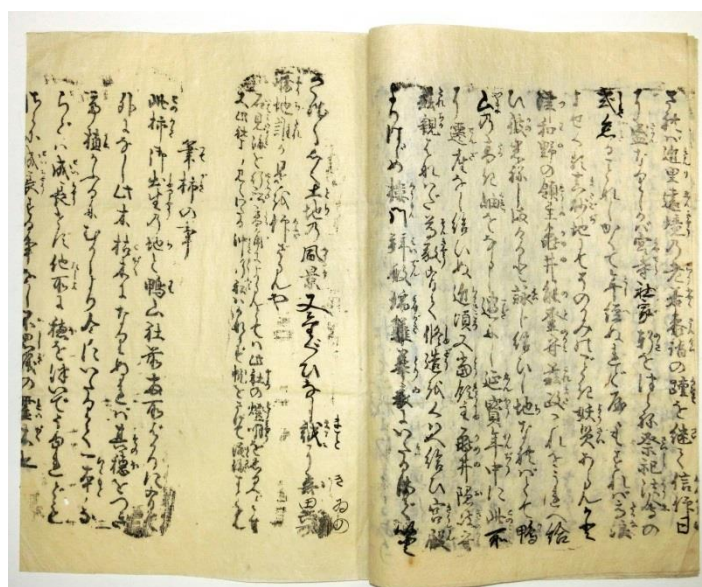
一、適宜、読点および並列点を付した。

一、抹消部分は、原則として訂正部分をそのまま本文とした。

一、改行や割注は原則として原本のままとしたが、意味をとりやすくするため、改めた場合もある。

一、説明として加えた傍注は、() で示した。

一、本文右上に小活字() 書きで付した数字は、講座で用いたテキストの頁数を示している。頁の区切りには破線を入れた。



「石州高角鴨山 正一位柿本大明神社略縁起」(安部家文書 1398)

「石見国出雲国記行」4月5日条にみえる柿本神社の「筆柿」に関する説明あり

石見国・出雲国記行

① (表紙)

石見国・出雲国記行
(ママ)

②

卯月三日のひ、まつ石見路へ赴かんとて、花の香のうつる衣をぬきかへて袖すゝしく立出にけり、とよめる、やかて石観音てふ町を過て今八幡宮ふし拝み、金古曾仁壁宮を過、宮野川原伝ひ行、

山路にかゝり、杖坂といふを越は篠目ニ至ル、文殊堂いふに着、飯なともものせり、かろうして長者原御堂原を過て、わたり川といふあやうき(橋)はし打渡り、やかて榎谷鷹巢二いたり、暮近くやとりもとめ得て日暮て

徳佐二草枕す 五郎七といへる里人二相やりして
文ひとひらふるさとへ遣又

(左)

十種ヶ峰

一四日朝またき立出 ひとんにとくさかみといふ高山そひえへて見ゆ、二里はかり

行、野坂といふ 御堂所有、又大なる池有、夫ヨリ良二向ひ埤二いたり、国堺印石

有けり、又道の中二大なる石有、眼下二津和野城下蔵町見ゆ、又右二青野

(形)

(章五)

嶽と芝山高くそひへたり、かたちふし二似待りければ、けふよりや青野か

(章七)

たけの名をかへて石見のふしといふよしもかな、谷ふかく下りて津和野城下至、

夫ヨリ山路いくつも打越、涼松とかや二しはしやすらひ、商人宿谷柳

なといふ村さと打過て、埤へいたれば、東南二山をかさね、西北はるかに海原

③

臨ミいとなかめよし、又良二大なる谷川見ゆ、下れば青原町、川辺二いたり渡舟有、

(も)

此より高角へ下り舟有と聞と、川添ひ山ミち伝ひ行けは、がけといふ大川を

須佐高山

添谷三星

横田

遠尾埤

高津川

出羽国桜皮

四月五日

柿本神社

筆柿

熊野松

益田

医光寺

④ ひろめさせ玉ふと聞て此迄くめれど、昨日此地を立出玉ふといふ二力も

おちて、はや午過ル比にも成ければ、飯乞得てたふべけり、扱心急て

立出つ、やかて雪州和尚の築せ玉ふ庭有と聞て、尋ね行けり、此寺(萬福寺)

夫より足はやめて埤を越、津田ノ浦・喜部浦など過(末部)

(低)

(二隅)

鎌手高下なといふひゝき山ミち、ミすみわたりいふわたりの山といふ

名所有けり、また日も高けれと草枕す

一六日またき出つ、山ミちたとり行は平原といふより、大麻山への

裏ミちといふ印石有 廿六丁、詣はやとて十二丁はかり、東の方谷へ下り

地藏谷といふ、此辺谷川二水せき入て、鉄砂をとりて世渡りの便とせり

水ニ土ヲ流

鉄砂ハ止ルヲ取也、かろうして山路十四丁計わけ登は大なる杉有、又仁王門を

大麻山尊勝寺

過て三丁計登り山寺有、大麻山尊勝寺といふ、此庭上より石見の海つら遠近見ゆ、中ニも長門なるすさのかう山高くそひゆ、又とくさかミといふハ、かう山ニまさりて高く見ゆ、なかめいとよし、筆も不及也

⑤

鳥井過、石上登れば権現御本社ニ至ル、

走湯大権現 熊野大へ、御額五社、此上郡而

杉大木敷をしらすたちこもれり、

藏王大へ、又金剛石といふ有

弥山ニ岩舟といふ有と聞も、今は埋レリトゾ

白山大へ、

此山の右ニ鬼か城といふ古跡有、又明神山といふニ城跡有、山中ニ志田尾山洞泉

寺といふ有 隠居地、又コマノ爪といふ石有、それより本道伝ひ、岩根さく山

みち四十余町下り、通りの本ミちニ至ル、此寺

天領也、三十五石、又浜田領より五十石と聞ゆ、留地也

一里半計行は、周布村ニ至ル、此村より川伝ひ一り計小ミチ伝ひ行

川上なひ村といふ、

長福寺といふニ性堂聖錫をとめ玉ふと聞て、尋ね行

相見す、此寺仏舎利の石塔有、彼和尚御法ミちひろめ玉ふければ此地ニ

三夜やとりす、仏名会といふをひろめけり、諸人群集す、△内山といふ名所有けり

四月九日

一、九日、かのひしりの道徳をしたひ行、見送れる人々僧俗おゝかんめり、山越

鼻作 左ニ長浜といふ浦町を見、熱田といふ町中ニ出つ、又ひきゝ山越し

てひたんニ△さゝ島 所名ニまちかく、△いせおかたといふ有 所名岩計、今は一町表

二見ゆ、かたといふハ名のみ成けり、又さゝ島ニ井ひて瀬戸浦といふ有、大舟敷

艘かゝれり、やかて

⑥

浜田城下町三至、洞泉寺ニ着、此寺ニ彼ひちりのゆかり有 由 医光、長福院等、安国院寺

こぞりて七日中の仏会を願ひければ、彼聖仰けるハ、此寺小院なれば、日毎ニ

方衛といふして仏会を営ミ侍るに、しかゝとて七日とまりぬ、われも

仏縁にひかれて止りけれハ、日々たくはつす

四月十六日
大施餓鬼

一十六日ニいたりて仏会もおハりぬれば、けふハ大施餓鬼といふを営て供養す、
諸人市をなせり

四月十七日

一十七日、浜田を立出つ、さいか埤いふを越、下郷といふ小埤打越て、浜ニ出レハ

国分のはまといふ、海人鰯を獵す、獵舟おゝし、過て波子村といふ

浦也、寺有、立より玉へり、飯ものせり、やかて敬川といふを越て、川舟

都の津はまてふひろくし、いハしを獵す舟多し、いとゝ賑へり、小埤越て

和木といふ浦里ニ至れば、此ほと 先月九日、此里百二十軒 火災ひにて今ハ家

二三軒のこれりといふあハれ也、立のほるけふりニおさなき子らまよひけれとも、

ひとりものこりなく、山影ニ氏神の社さしてにけ行けりといふ、ケカ トシ

⑦

いかさま神やまねき玉ふらんといへり、鶏ハミなやけ死せりとて、やかて

江津ちかく天領の堺印有けり、雨ふり出しけれ、江津の観音寺といふ和尚

ひちりの御迎ニ出迎ぬ、雨やミもやらねは、日ハ高けれとも、此寺ニ休ふ

（沖田や何かしといふ 此寺の主心はせふかく、先住の謂ありていろく願ひけれハ

性堂ひちり、やんことなくニ夜止ぬ、昼ハ御法をひろめ玉ふ、又観音の

像を紙ニものして印施しけり、里人歎ぬ

一十九日、江津川 幅一りといふ 舟にものして打わたり、塩田浦 川尻ニ荒神の小島山あり、

浅利を過て、あさり中山ニかゝれば、蒼海まんくとして 北ニ 見ゆ、東南ハ

山を見ル、又北ニ出雲のひのミさきはるかに見へいと詠

よし、○此辺村々浦々ニ秦雲院儀岳大居士の塔有 井戸平左衛門正明 俗ニいも殿様といふ、此謂を聞ニ

享保十八丑とし、琉球いもてふ種を施して植させ玉ふといふ、よつていも殿といふ

よし、其仁徳を八百ノ民等称して、かゝる報恩のためとを聞ゆ、印石ハ近比建ル也、

⑧

浜辺ニいたり、又ハ里ニ入 黒松村 過て、尾はまといへるひろき浜ニいたれハ、

大江の高山
福光下村
温泉津

四月二十日

御中山

西田村

宅野

鶴ヶ城

石見銀山

鑪

毛利元就木像
長安寺

五百羅漢寺
大森

数百海人いへし獵す、又東二あたりて、大江といふ村二大江の高山といふ見ゆ、
^{名所}是なん△高山なるべし（^{はるかに高く、}そひへて見ゆ）^湯福光下村過て、^{温泉津}温泉津二至、

此里出ゆ有ければ、日ハ高けれとも儀枕す、宿松や治兵衛、此浦二かう
や何かしといふもの、^{（聖）}ひちりの御高德を聞、ひとひら御染筆を希へり

一廿日、ひちりはいそかせ玉ひて立出けれと、御供の僧俗いまた支度も調ハ

さりければ、我ひとり跡よりいそぎ行けれとも余程おくれり、かろうし

心やたけ二急て、御中山^{（ゆのつのお}中山といふ廿丁計経て、ミちのちまた有けり、我ハ

まよひもやらて^{西田村}三着、^{（ひちりニしかくといふ、}おそなはりつる人々を

此ニテ待、御跡より急かはやといふて、ひちりハ大森さして行けり、さて

待とも見へさりければ、^{（せんすへもなく、}業路坂^{越れば}といふを登れハ、

此山伝ひ鼻二沖二△たぐのといへる浦見ゆ、又沖二島二つ小^大見ゆ

又右三仙のやまといふたちこもりたる有けり、^{（シロタネ）}此上銀出ルよし、又向二鶴か城と

いふ有、此山毛利君昔住玉ふよし、谷ふかく下れば銀山の町ニいたる

町の中ニ谷川の流有、此川二銀のくさりといふを洗ふなり、又た^{（鑪）}ら有

二軒計と見ゆ、役所有、下り行は左二道辺ニ

毛利元就公御菩提所、御木像安置といふ石印有、^{（冠）}洞春山長安寺といふ二立より、

此比普請中なれとも願て御像を拝す、御かんふり、^{（袈）}しやうそくを着シ

玉ふいと有難し、段々御判物其外書物多し、やかてクワン貫てふもの有

又岩の洞ニ五百羅漢を石ニ作りて安置す寺有けり、町つゝき^{（大森）}大森

いたる^{（銀山御代官の}寺々多し、^{（蔵町よ）}此山里ハ女の色白くして、^{（肥後や}周平といふ

飯なともものせり、かくて随伴の僧たちミちを連れて、^{（名もなく山く）}

うち越て此地ニて逢ふ也、しかくといふ、

久利
大田

四月二十日
波根 波根湖

田儀

鰯

杵築

四月二十日
海巡り

稲佐の浜

塩掻島

杵島・獅子頭岩

道祖神島

硯の花立の松

ひろけか浦

屏風岩

つふて岩

不吞谷

おにしか鼻

焼き飯島

御経島

馬島

日御崎神社

今しあらは問さり物を石見路の岩根さくミちふみなまよひそ
^{（久利過）}大田町二やとりす

一廿一日、出て^{（波根）}波根、湖水有^{（周）}一り位、此より海辺山路伝ひ、^{（田儀）}田儀を過て三里浜

といふ白き砂路浜伝ひ也、鰯多し、吹上の砂山打越て大川二出、折ふし舟も

なければ里人かたらひてやうくかちたりす^{（お腕）}本ミち通行は、^{（周）}周二り計なる潮有由、^{（杵築）}杵築

着川上や何かし泊、此国二三所ノ内、寺といふ観音の開帳詣

一廿二日、けふは天気よく、海つらもなきと聞は、舟かりて飯の宮といふを右二見て

いそさたの御浜より舟二のり、沖の御前、おうこう浦の塩たきしまなと

七月四日夜半過、大社の神々御幸有よし、見めぐり、やかて枕島といふハ

大なる石上ニ獅子頭といふ岩乗り、幡さししまといふ松生へり、鰯の穴と

いふ有、^{（此穴学エン寺二通スといふ話、}○道祖神しまといふ山根二あり、

○硯の花立の松といふ有、此松春もみとりヲ不出、枝垂て枝末ニ水シタ、

ル也、硯の水ニ用とそ○ひろけか浦といふ^{（帳面ヒロケタル}形ナリ

いふ有、○つふてしまは大なる石つふての如くツミ重り、△錦か浦とい

ふ^{（名）}所、此島根岩枝を重ねたるもやうなり、○不吞谷と

いふ谷有、十月二ハ毒水流て浦人も不吞とそ、○おにしか鼻といふ岩根

有、都て此辺山根ミな石也^{（昔此所より鬼の数千方八千二百、四万八艘の舟にのりてせめ登りしを、}

○やき飯島といふハその名のこし、○御経島といふハ経巻のうつし重ねたる如し

島三ツ二わかれて見ゆ、中ニ六有舟通へり、此島いとおかし○又馬しまといふ名馬

出たる穴有、やかてミさき着^{（日御崎神社）}干過て楼門有、御宮作りいとよし、玉垣

本ひわた也、ほこら多し、前ノ山間三三重の塔崩かゝりたる有、あはれなり

御本尊薬師とて、惣てケツコウいわんかたなし、御宝物拝見、又殿上す

名物わかめ

一人 士銅宛 わかめ名物也、また舟二のりて沖ニ舳島いふ有、小しま也、
内々事か 遠方より見ゆル

○良ニあたり、おき国有と聞も見へず、○沖へまん／＼たる海上也、常ニ浪風
はけし、南ニミかミ山といふ 又三部山、此上 芸石出の とも云 ふとく高くそひえたり、
又三里はまよりつゝきて、石見のおくらか鼻といふ、はるかに見ゆ 十五里 海山
この鼻二つゝキ

出雲大社参詣

長門のすさのかう山も見ゆと聞も不見也、○昼時着舟、宿ニかへり飯ものして
大社ニ参詣す、御宮つくりふとくたくまし、八丈いと尊とし、諸社多けれと
ことごとく印シ得ず、心言はも及ひかたし、依略之、委曲絵図并略記ニ印す
せり、**今市町**よし過て、町頭大川をかちわたりす、**直江町**過て、吉成村ニ至ル

吉成寺

吉成寺着

四月二十五日

一廿五日、曇天、五ツ時立出、直江丁横ニ良の方、田中ミち一りまり行
の 斐川 仮橋 水洩て砂のミ多、鉄砂流事多し、北ニ鳶巢といふ古城山有
尼子家 又同し山つゝき東ノあたりて旅伏大権現 タヒス 桓武帝 祭レリト云 山上有
古跡トソ やかて康国寺着、庭上池有、普請そうし等よし、飯ものして夫ヨリ亥方
（倉除）

へ向ニり計、川下ト云浜辺ニ出つ、又

鰐淵寺

弁慶水

平田
雲州木綿

未ノ方谷川伝 廿丁まり、山路ふかくわけ登て、鰐淵寺縁記有よて略す
滝有、此滝坪みさきの海底二つゝくといふ 有 謂 又 観音御堂左右いとし 享和比 東英山よりノ御額有
又弁慶水として井戸有、此山中八葉峯といふさうを見ゆ、かろうして山を下り
平田町へ着、木佐屋徳三郎、御願ヨリて御止宿、夜中御スイカ・ヒシキなど
御授ケ有之、○此地雲州木綿第一出来立由及聞ければ、黒田屋仙三郎といふ
店にて式足計買得ず

四月二十六日

志道湖

一畑薬師

一廿六日、木佐宅ノ向ニ丁計行、堀川筋より舟ニ而一里下り湖水ニ至 横二り 七り位 折柄
東風ニ而向風なればすゝミ得ず、やう／＼一里計あらく浪立たちければ
揚陸ス、ミちはた薬師霊場一里計、左ノ山上見ゆれと、いそぎの

松江
茶町・京店

京橋

松江城

本庄

枕木山
華蔵寺
大山

まうても得やらて、土橋うちわたり、（湖水 分流）
一里間松江城下ニ至、茶町京店などいへる蔵町打過きて大橋ニいたり、長サ七十五間
ければ、普請中にて二丁はかり下りて川舟にものして、やかて中町小目代と
いふ問しかく云、又茶町米や何かし 清右衛門 本所号し まかりければ蔵ひちりも
こゝへ御着也、夫ヨリ駕籠夫雇得て、京橋 唐金 打わたり、城天主、矢倉
こち高くそひへていとよし、夫ヨリ町を離、本郷といふへ三里、此ヨリ
枕木山へ十八丁登り、一王門打過て尚山ふかく華蔵禅寺ニ至ル、此ヨリ
沖ニおき国見ゆ、表方 内々三六 とそ、又ほうき大山見ゆ 麓迄 八里、高根の雪消やらて
いと詠めよし、戌亥ニ当りて因州つ崎ニ打越て、雲霞の方角ニ
（但馬） 田島の国の出鼻見ゆ、里人ニ問とも地名ハ不知、都而四方詠
いとおかし

四月二十七日

加賀浦
応海寺

瀬戸

一廿七日、またき起て東海ニのそミ見れば、あかねさすひかり海原に
たちのほりて、日の出を拝ミ奉りけるハ、昔ふしにて拝ミ奉りけるも
同しやうニおもはれて難有さいはんかたなし、又しのゝめの比より百千鳥
さへすりて、
かろうしてけふは加賀浦、（ケ下） 瀬戸を見はや、此山つゝき、いねの方峯つゝき
山々四ツ五ツ計越て、良方谷ふかく下り、かゝ浦応海寺へいふへまかりて
枕木ノ （ケ下） 茶飯などもてなしける、扱やかて舟ニものして神瀬門といふにのそミ
見れば、さなから別世界ノやう思ハれける、岩窟上八十丈計左右七八丈、

其中へ舟にて二町計行、艮出ル穴有、又巽二穴有を打わたり此岩窟の外をめくりは、上はたかまか原といふけうの場所ナリ、又左クケドといふハ

地方ニよりて岩窟有、さいのか原といふ、此穴中都て、岩つみ重て

五輪の形をなせり （賽の河原） 若あやまりて崩せは 又向へわたり小島有、金利はまと

いふ二舟よせて金利といふ砂を拾ひけり、かろうしものミちへ戻ル

四月十八日

一廿八日、心王銘講ヲ聞ク、けふは心静ニ山内を拜みくらハやとて、先山ヲ

半下り里人に問は、麓ニヨリ

華藏寺
地蔵堂
仁王門
薬師堂
杉井霊水

凡十八丁登リ、地蔵堂有、二丁計登二王門ニ至て又二丁登岩垣高ク薬師御堂有 （靈伝）

古作御ひぎ鎮て安置なし、時二枕ヲ敷て安置せしに、又御堂ノ下ニ杉ノ井ト云名水有、不知作

此水 （不） 帝の時、元旦の若水に奉献られるよし、今も此水によりてきづ

山王権現社

ハかずく、とそ、かろうして登りて山王権現社有、

本堂

又三社殿社有、又ほこら有を拜みめぐり、二丁計より登、楼門に至、本堂

稲荷社

二至、又楼門前より東江一丁行

稲荷社ヲ過、半丁計行て日出ヲ拝ス、東海上湧出し玉ふいと有かたし

四月十九日

一廿九日、山ヲ下り本庄町ニ至ル、此浦ヨリ舟乗て松江の流ヲ南へわたり二里意宇郡

錦浦

△錦浦へ着岸、夫ヨリ竹矢村安国寺へ着、里人互御徳をしたひ詣てくめれ

竹谷安国寺

は、三帰リ授ケ玉ふ、申刻雷鳴雨ふるければ、此寺ニとまる

四月二十日

一卅日、出雲江といふ二雲河とてふ川打渡 （土） 左三若君社有、大内家、伊藤町

出雲江
大内神社
意東

過、湯谷権現社有、所も湯谷といふよし、やかて海辺へ出れば、向二枕木山見ゆ

廣瀬
城安寺

いとなかめよし、かくて大河川の堤伝ひ坤の方へ、右左手三り計登り、廣瀬

城安寺

城下の蔵尻より河川打渡、竜龍山成安寺ニ着、此ハ昔尼子の古城三丸のあとといふ

五月一日

一五月一日、吐月山といふ尼子家の古城あと見物す、古 （二） 又社有、此麓ニ塩谷と

月山出城址

いふ村の氏の神ト聞、城下町眼下見ル、又海辺ちかく見ゆ、向の山ニ毛利家戦チン

の山有

（*四月三十日条・五月一日条 記述 種類あり）

四月三十日

一卅日、出雲江と云川打渡 （土） 此川雲河といふよし、川上ハ熊野村と昔熊野

出雲

関有と聞ゆ、やかて湖の末、こゝもなを水海といへと、汐交て海人海魚を獵す、

若君社

なかめよし、ミちの右はた二若君といふほ （大内家の） 又湯谷といふ町中ニ

湯谷権現

湯谷権現の宮有、かろうして富田川と云堤伝ひ二りまり坤ニ向登り行、

富田川

名にたたる、（城安寺） 廣瀬町の末より異当何川打渡、雲龍山成安寺へ至

五月一日

一五月一日、川伝ひ三四丁計登り、石垣こちたく見ゆ、登れば睡虎山巖倉寺と

巖倉寺

いふ觀音霊場 （此国十八番） 諸堂多く拜みめぐりて又常念仏有けり、此庭上

堀尾吉晴墓

堀尾茂介君印石有、上松生て古ひたり （此井かこの中の小石とりてイボてふものを）

月山出城址

夫ヨリ此山の高根ヲ吐月山といふ古城跡也、尼子君のすけるよし、わけ登れば

高守大明神

今も所々石垣堅固也、やくらてふ跡といふ、やかていたゝきに登れば、沖の方海原

廣瀬寺

見はらし、眼下廣瀬の町見ゆ、又井二ヶ所ほこら有、高守大明神といふ、此麓ニ

光山和尚

汐田村といふ氏神とそ、かろうして山を下り、富田川打渡り十町はかり下りて

廣瀬寺

道の左馬場有を伝ひ行ける、廣瀬寺光山和尚を訪ふ、茶などものしてもてなしけり

光山和尚

たそかれ近く帰る、（マ） はしめて星を見て

五月二日

出雲なるのきのこほりの螢火ハ零に星のやとるとやミン、とよみて帰ル

五月二日

一二日、昨日まで随伴し奉りければ、性堂ひちりは此ニしはらく錫をト、メ

玉ふけるよし仰ありければ、こゝより御暇乞けり、妙堪老隠和尚伴ひてさへらは

玉ふけるよし仰ありければ、こゝより御暇乞けり、妙堪老隠和尚伴ひてさへらは

よとたち出んとする時、此よりハ山路ふかく路おほつかなしとて伴ひ侍りける人

相添らるあつきなざけも悉しける、夫ヨリ富田川を渡り、又川伝ひ十丁

相添らるあつきなざけも悉しける、夫ヨリ富田川を渡り、又川伝ひ十丁

清水寺

あまりかりはし打渡りてほうきの国米子路さして田中ミチニリまり
八丁計□□山わけ登れは三門有、打過又少し下り清水寺ニ至、觀世音大御堂、
石垣高し四間、登り、大御堂、諸社諸堂多し、大同元年御さうくと
聞もいと尊し、又坊中六七ヶ島

弓ヶ浜

此山谷々ニ見ゆ、中にもいとたけのしらへ谷にひゝき聞下れは
かろうして山を下り、行海辺に出つ、又向の山前三天守見て

米子

なかめよしアツカリ城也、夫より一リまり廻りて米子に着、蔵町長く過て
ひの川といふを、うち越て尾高といふ村草枕、遊中万蔵

五月三日

赤松の池

一三日、巽二向、芝ミチ式里はかり自然登りにのほりて、赤松の里を過ぎ
て赤松の池に至、水清く澄て

放生池

おのつからなる湖水也、又鯉鮒多く見ゆ、里人にとへは放生池成といふ、
深さはかり

蛇

しらねす、蛇躰すむといふ、向ニは山しけりたるケシキ、
入江ニ添ひていと詠によし、

大山

名物豆腐

又野山芝ミチふみわけ登、一里まり唐金華表有、右左岩かき
大木多し、此にて店や二よりて飯ものせり、五丁計登行

大神山神社

参らはやとて二丁はかり登、石の階より登れは
上宮大明大権現御本社、乾二向せ玉ふ、丑辰方少し下りて下山大明神御社、
下りて中宮大日如来御堂有、靈藏大権現御社有、
谷川のさかまく水を打越て、

(釈迦堂)

夫下宮、釈迦堂、金剛童子御社有、此御社ヨリ見居へたる海つらひろく
雲にたくへて目行もおよはさりけり、又弓かはま眼下見へて、出雲の三保湊ニ
ツ、ケルかと見へて、なかめさへいわんかたなし

下れは又谷有も登り、阿弥陀堂、利寿大権見社、荒神社有と聞を

雨ふりくめれば此より拝みて、少し下りて西の方山みちわけ登らは、坊
中に都合四十二坊とぞ、夫ヨリ山のはしを離、方々めぐり行は、所々

(19)

弥山より崩れ出たる数多し、丑九月十日朝の事也とぞ、

高根さしみえるみちさへ白雲のうちに声ある山ほとゝきす

葛木打こもりていと心細く、往来もまれ成、

時鳥たつ木もしらぬ山中になか名を名のる声そゆかしき

やうく三リ、水久江といふ山家十軒あまりなるに着、しはし

休らひ、又山みち一リ行、下り賀谷といふ岩枕す、

一四日、山みち登り下り二里はかり、野武人といふ山家十軒あまりなるに着、しはし

此所クロ細工有、土産ため二ものす、一リ半藤森、此ヨリ少し行

此にて飯ものす、二リあまり、土井といふ、此ヨリ谷川伝ひ、山川みち

一リ行湯真賀宿、肥後や

(20)

一五月五日、けふハ端午午なれば、ちまきてふものとふへて出つ、

五十丁みち四リ計谷川伝ひ、右左共二山高く、木曾路二こと

ならず之由、勝山城下、板橋打渡り、城下丁過て七十二丁、久世

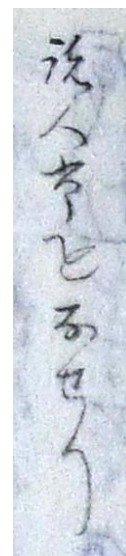
三リ、坪井廿丁余、千台家四五軒有、泊

一六日、此ヨリ直二行は津山城下なれと、巽の方岡山みちを

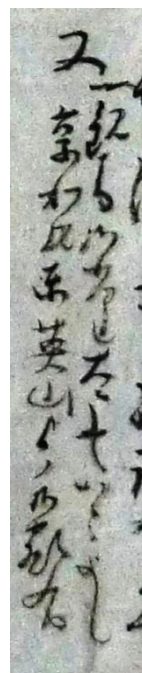
もとめて四リ行、誕生寺ニ参詣す、いと尊とく難有し、

【難読箇所写真】

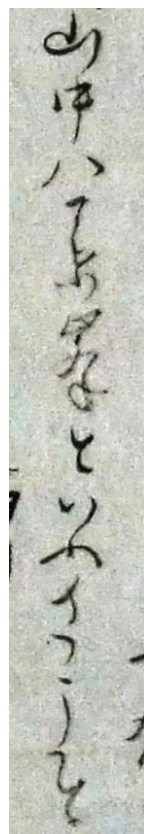
*写真1



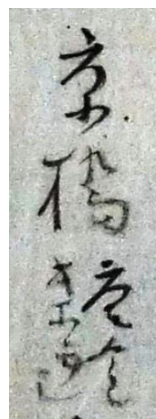
*写真2



*写真3



*写真4



*写真5



*写真6



*写真7



*写真8



*写真9

